知っておきたい病気
宇部市医師会眼科医会

色覚のお話

将来の進路を考えるために

私たちには、いろいろな色が見えます。そして日常生活の中で当たり前のように、色の判断をしています。ただ色の判別がしにくい人もいます。その人たちは、色覚異常といわれています。異常と言うと特別な病気のような感じがしますが、決してそうではなく、この状態を表す適切な言葉がみつからないので、色覚異常という言葉が使われているのです。もっと自然で生活感のある呼び方がみつかるといいですね。

多くの色覚異常の人が判断区別しにくい色の組み合わせの例をいくつかあげてみますと「赤と緑と茶」緑の葉とつつじの花が見分けにくい。生の肉と焼けた肉の区別が難しい。レタスの葉の傷みが見つけにくい。

「緑とだいだい色」赤卵が緑色にみえる。マージャンのパイの色の区別が難しい。「ピンクと水色と白（灰色）」白猫の足の裏や鼻の桃色が周囲の白と区別しがたい。英語のノートの基線である薄いピンクが他の青い線と区別できない。

このような人々は男性で20人に1人、女性で400人に1人の割合ですので、それほど珍しくはありません。著名な人でも色覚異常の人はおり、それを公言される方もいらっしゃいます。

イギリスの大化学者ダルトンは色覚異常でした。当時、色覚異常というものはまだ知られていませんでした。ダルトンは、自分の色の見え方が友人たちとは違うことに興味を持って、詳しい記録を発表しました。これが色覚異常に関する科学的記載の最初のものです。

この論文は、花や衣類の色についてどのように見えるか、同じような特性を持った者が家族性に見られるなど200年たった今でも通用する立派な論文です。

普通、化学は色覚異常の人には不適当とされています。しかしダルトンを見れば、適性を定める第一の条件は色覚でないことは明らかです。他に優れた能力、努力があれば色覚異常の不利を補うことができます。

最近は色覚バリアフリーという取り組みも進んでいます。学校でも以前は色のチョークの使用に無頓着でしたが、今ではそういうこともありません。

ただ色覚異常の児童では、図工や美術の時間に、色使いが少し変わっていることがあるかもしれませんし、カラーの教科書、赤ペンの添削、理科の実験などで見にくいことがあるかもしれません。しかし色覚異常と診断されていれば、先生も配慮してくれます。

以前は理工系、医学系、教育・芸術系への進学や就職において厳しい制限がありましたが、最近は大幅に緩和されてきています。しかしながら皆無というわけではありません。

たとえば警察官、消防士、パイロット、鉄道員、航海士、自衛官、インテリア関係、電気の配線の仕事には、色覚に異常がないことが条件になっていることがあります。

また色の誤認によって危険が生じることが予測される仕事には、あえて就かない方がいいかもしれません。

だから、自分があるいは家族が色覚異常でないことを確かめる、あるいはそうであることを知っておくことは、将来の進路を考えるために大変大切なことなのです。

以前、小学校4年生の学校健診で実施されていた色覚検査は、現在行われていません。多くの学校では、希望者に検査が行われています。大切なことなので、養護の先生にお願いし、スクリーニング検査を受け、正常と判断されなければ、最寄りの眼科で精密検査を受けることをお勧めします。

（長谷川眼科琴芝クリニック・長谷川奈津江院長）